中央大学社会科学研究所年報　第 16 号（2011）

国境を踏み固める小道（3）

――追悼におけるイストリア故国喪失者の“わたしたち”――

鈴　木　鉄　忠

Local Steps to the Frontier (3) : How “We”-Consciousness is Constructed by the Istrian Exiles on the Remembrance

Tetsutada SUZUKI

This article aims to explore a process of constructing “we”-consciousness as collective identity among the Istrian exiles in Trieste, Italy, especially with using the case of on the “Remembrance Day”. First, I review the two concepts of collective identity (Melucci 1989, 1996) and frontier (Furuki 2010) in order to focus on dual aspects of networks that develop among the exiles and particular issues within the border regions of Italy, Slovene and Croatia. Second, I describe and analyze the procedure of commemorative events organized by the groups of following opposite networks, which I term “national block” and “transnational network”. This leads into a discussion that, while the groups of “national block” try to produce a community-consciousness among the exiles and the Italian people through nationalistic ritual performance and victimization of exiles, those of “transnational network” attempt to represent their community as transnational and regional. The latter groups publish some books about an unknown tragic event occurred in this border region and hold a moderate memorial meeting. They collaborate with historians, Italian minority associations in Croatia, and local authorities beyond the nations and borders so as to produce new sense of ‘living together’.

1. 問題設定――追悼のなかの“わたしたち”

1.1　追悼をめぐる二つのネットワーク

本稿の目的は，前拙稿[1)]のイタリア・トリエステ「回想の記念日（Giorno del Ricordo）」における組織間の動員ネットワーク分析の知見を踏まえた上で，それらのネットワークを支える“わたしたち”を明らかにすることである．

2009年度の「回想の記念日」においてトリエステのイストリア故国喪失体験者団体はいくつものイベントを開催した（巻末，補遺の表－1および表－2，参照）．これらのイベント・データの分析により，“ナショナル・ブロック”と“国境を越えたつらなり／つながり”という二つのパターンのネットワークが析出された．そこで本稿では，双方のネットワークの基点となっている二つの団体に着目する．すなわち，“ナショナル・ブロック”からはイストリア連合会（Unione degli Istriani，表－1，11），“国境を越えたつらなり／つながり”からはイストロ・ヴェネト〈イストリア〉文化会（Circolo di Cultura Istro-Veneta “ISTRIA”，表－1の8，以後通称のチルコロ・イストリアと記載）である．そして，双方の団体が主催した追悼儀式の実施プロセスに焦点を当てる．そのイベントとは，イストリア連合会による「フォイベの殉国士」の追悼儀式（表－2，イベント4と5），チルコロ・イストリアによる「アルシア炭鉱事故から69周年追悼会」（表－2，イベント16）である．

では，なぜ追悼儀式に着目するのか．B. アンダーソン（Benedict Anderson）が述べたように，「偶然を宿命に転じること，これがナショナリズムの魔術である」[2]．「死」にかかわるイベントほど「国民的想像力」が作動し，「想像の共同体」としての「われわれ＝国民（ネイション）」が現れる瞬間はない[3]．しかしながら逆にこの瞬間こそ，「国民的想像力」を抑止するような実践が試みられ，「われわれ＝国民（ネイション）」とは異なった“わたしたち”が立ち現れるときでもある．そこで追悼儀式がどのように行われるのかをフィールド・ワーク[4]から記述し，どのような“わたしたち”が構成されるのかを分析する．それによってヴェネツィア・ジューリア地域における「越境協力と差異ある共生」の可能性の在りかを探るのである．

さて，具体的な記述と分析に入る前に，その背景をなす二つの視点についてふれておきたい．それは分析対象とする動員ネットワークに関して，A. メルッチ（Alberto Melucci）の「集合的アイデンティティ」[5]の視点である．そして調査フィールドのヴェネツィア・ジューリア間国境地域に関して，古城利明の「フロンティア」[6]の視点である．

2. 分析の視点——集合的アイデンティティとフロンティア

2.1 ネットワークの二重性

社会運動論によれば，ネットワークは二つの次元が密接にからまったものとして現れている[7]．一つは「動員ネットワーク（mobilization network）」である．これは特定の目標をめぐる社会的コンフリクトが発生した局面において，限られた期間内に限られた空間で可視化する限定的なネットワークである．これは可視的なので実証が可能なレベルである．もう一つは「意味のネットワーク（networks of meaning）」である．日常生活のなかで運動にかかわる人々のあいだに潜在するつながり／つらなりの全体である．この次元は，日常生活，運動にかかわるメンバーの欲求やアイデンティティと密接に結びついており，動員ネットワークを下支えするもの

である．これは潜在的なため実証が困難なレベルでもある．A. メルッチがいうように，現実には分かちがたく結びついているこの可視的な動員局面と潜在的な運動局面を，分析の際は峻別して扱わなければならない[8]．動員ネットワークは，いわば伏流水のように潜在していたこの意味のつながり／つらなりが，ある特定の争点や限定された期間において結晶化したものである．その網の目のなかに，「抵抗や反対へのポテンシャル」[9]，「未発の社会運動」[10] が縫い込まれている，とみるのである．

このネットワークの二重性の知見によれば，前拙稿で明らかになった動員ネットワークは，同時に「意味のネットワーク」としても捉えることができよう．「回想の記念日」において結晶化した“ナショナル・ブロック”と“国境を越えたつながり／つらなり”の地下には，「未発の」ナショナリズム，あるいはそれに対する「抵抗や反対へのポテンシャル」，「未発の社会運動」が伏流水のように脈打っていると推測することが可能である．これらのネットワークを支える“わたしたち”を分析することにより，「われわれ＝国民（ネイション）」を一方の極として，そして他方の極にはそれとは原理的に異なる“わたしたち”のあり方を理解することができよう．

2.2　集合的アイデンティティ

このような“わたしたち”のあり方を捉えるために，A. メルッチの「集合的アイデンティティ」[11] の概念を援用したい．この用語は様々な論者によって用いられているが[12]，メルッチは集合的アイデンティティを「レンズ」のようなものだという[13]．顕微鏡が肉眼では捉えられない微細な対象を可視化するように，この概念が「社会的行為者がどのように集合体を形成し，自ら自身をそのなかの一部として認識するようになるのか」[14] という動態的なプロセスを可視化するための分析概念の意味で用いている．分析者は，集合的アイデンティティというレンズを通して，「集合行為のなかに存在している諸相の多元性に取り組まなければならず，それらがどう組み合わさり時間を通じてどう維持されるのかを説明しなければならない」という[15]．

この“わたし”が“わたしたち”へとなりゆく創発的なプロセスに関して，メルッチは三つの局面を指摘している[16]．詳しい検討は稿を改めたいが，①認知的定義（cognitive definitions）は，“わたしたち”は何をどう目指すのかという行為の志向性（orientations），それを促進したり抑制したりする行為のフィールド（field）の定義が「共有される（shared）」プロセスをいう．フィールド・ワークの場面では，活動を象徴するフレーズ，行為者たちの言説や語り，追悼儀式での実践，出版物などのドキュメントを手がかりに推察することができる．これらの文化的構成物を測定指標として，行為者たちが共有しようとする認知的な定義を読み取ることができる．②行為者間で活性化する諸関係性のネットワーク（a network of active relationships）は，互いに作用しあい，交わりあい，影響しあい，交渉し，意思決定を行う一連のプロセスを指す．この相互作用がある程度安定化していくと，その集まりの組織形態，リーダーシップのあり方，

コミュニケーション回路へと結晶化していく．フィールド・ワークでは，結晶化したこれらのレベルが集合的アイデンティティの可視的な指標となる．③情動的な投資（emotional investments）は，集合行為に参加する行為者たちの意味に深くかかわるプロセスである．投資される情動と感情，愛と憎しみ，信念と恐れといった情動の塊を通じた交わりによって，行為者たちは自らを集合体の一部であると感じられるようになる[17]．

「アイデンティティ」概念についてもふれておこう．メルッチの捉え方は独特である．通常は「本質」や「実体」と結びついて考えられてきたが，メルッチは行為者たちによって自己定義が幾度もなされる行為のプロセスと捉えている[18]．アイデンティティは「わたしは誰か？」に対する応えである．それは，持続性，統一性，承認の三つの特徴に言及する．持続性は，主体が時間を通じて一貫性を保持することを指す．統一性は，主体が「わたし」を他の主体から境界を引いて識別することをいう．承認は，主体がこのように主張する持続性と統一性が他の主体によって受け容れられることを意味する．これら三つに応えられるとき，「わたしは誰か？」という問いに自他ともに認めることができる応えを出すことができる．

本稿の調査研究にひきつけていえば，アイデンティティの持続性は，故国喪失体験者たちが「わたし」を定義するときに参照する歴史，記憶，物語である．「想像の共同体」としての国民（ネイション）では「国民の伝記（biography of nations）」[19]にかかわる．とくに「回想の記念日」にはこれが顕著に現れる．なぜなら国民の伝記に「転々とその軌跡を示すのは死」[20]しかないからである．統一性は，コンフリクトの渦中では「わたしたち（Us）」と「かれら（Them）」のなかで対立的に表現される．国民（ネイション）のわれわれ意識は，「イタリア人」「クロアチア人」といったかたちで「限られた（limited）」社会集団として想像されることで識別され，その内集団（イングループ）の社会関係は「水平的な同志愛」で結ばれた「一つの共同体（a community）」として心に思い描かれる[21]．承認は，公的な承認や制度化，あるいは対等な相互承認や相互理解といったかたちに表れる．国民（ネイション）の究極的な承認は「主権的なもの（sovereign）」としての政治的共同体によって想像される[22]．

ところで，「わたしは誰か？」という問いに常に一貫した応えを持っているとは限らない．とりわけ不確実性を構造的な条件とする現代社会において，この問いに応え続けられるかどうかが複数の自己に安定性をもたらす必要条件となる．そうするとアイデンティティは，「わたしは誰か？」への応えであるのみならず，それに応えられるかどうかの力量として捉えられる．メルッチは，こうした能動的な行為やプロセスとして捉えられるアイデンティティの特徴を，アイデンティゼーション（*identization*）[23]という造語で表現している．このようなメルッチの捉え方は，中央ヨーロッパ的なアイデンティティの知覚と重なるものであるといえるかもしれない．アイデンティティは，自己という束をたばねる帯のようなものであり，帯自体は何も生むことはないが，束をたばねるには必要なものである[24]．アイデンティゼーションは，いくつもの自己をたばねる帯のように，何度も結んだり解いたりする行為のプロセスを示している．

次に，このようなアイデンティティの多重性とその動態的プロセスを，地域のコンテキストと重ねて理解するために，「フロンティア」という視点を援用したい．

2.3　境界域・国境域フロンティアとしてのヴェネツィア・ジューリア

古城利明は世界システム分析の視点から「フロンティア」という概念に注目した[25]．フロンティアとは，世界システムの中心部がシステム外の世界をそのシステムの周辺部に組み込んでいくときに生ずる空間を指すのだが，しかし同時にそこは「内部的多様性をもった広いゾーン」でもあり，「既存の社会関係を防御する空間」でもあり，この「既存の社会関係はポテンシャリティの源泉であり，豊かさをスピルオーバーする源泉」でもあるという[26]．

フロンティアに潜むこの緊張，両義性は，何故だろうか．それは相反する二つの視点がぶつかりあっていることに起因すると思われる．すなわち，一方には中心部からフロンティアへの視点（インコーポレーションによる透過性）であり，他方にはフロンティアから中心部への視点（「薄膜というメタファー」）である．この視点の問題は，A. メルレルと新原道信の「島嶼社会論」における二つの視点，すなわち島の外側から島をみる視点と島の側からみる「相対的な辺境（la marginalità relativa）」の視点によく相応している[27]．そして後者の視点が「《中心》のそれへと還元されないものの見方，世界観であり《自立》の基礎となりうるもの」であるという．そうであってみれば，フロンティアにおいて，中心部の側からではなく，フロンティアの側からみる視点に，社会関係のポテンシャリティがあるといえよう．なお付言すれば，ここでの「中心」と「辺境」は，地理的な意味ではなく，「視点」のちがいという認識論的な意味である．

さて，ローマ帝国崩壊以後のヴェネツィア・ジューリアに関して，古城利明はロッカンの中心―周辺構造にふれながら，境界域（interface）として位置付けている．四つの留意点があり，この地域は①中央交易地帯[28]におけるドイツ・ブロックとイタリア・ブロックに挟まれつつも，はみでていた，②経済の中心部となった北西ヨーロッパからは取り残され，中央集権国家の形成やそれへの組み込みも遅れた[29]，③西ヨーロッパ（ラテン世界，それよりは弱いがゲルマン世界）と東ヨーロッパ（スラヴ世界）が社会・文化的に接する境界域だった[30]，④東西南北の諸勢力の境界域に置かれ，19 世紀半ばまでどの勢力も積極的に支配地に組み込もうとしなかった[31]．こうした「歴史的地層」のなかに古城は「フロンティア性の発露」を見出す．

19 世紀半ば以降，とりわけ「短い 20 世紀（1914－1989）」という国民国家の絶頂期はラインとしての国境線（ボーダー）の策定・移動・消失により，多文化・多言語の混交・混成が著しいこの地域に深刻な亀裂をもたらしたことは，以前にも述べた通りである[32]．いわば境界域（interface）から国境域（national-bound interface）への移行期である．古城利明は，世界システム分析の観点から 19 世紀半ば以降から現在までのスパンを「長い 20 世紀」として捉えつつ，それの第三局面である 1990 年以降から現在までを，ヨーロッパ連合（EU）の統合・拡大の展開のなかに

位置付ける．ヴェネツィア・ジューリア地域はEUという「新しい中世帝国」の先端部部分に組み込まれたとみる．そしてこの地域の共存・共生の動向と自治の可能性を考える上で，「二重の困難」を指摘している．第一の困難は「国境を《流動状態にあるソフトな国境ゾーン》に組み替え」[33]ること，言いかえれば国境を挟んだ社会関係を，「われわれ（Us）＝国民（ネイション ヴァーサス）」対「やつら（Them）」という対立関係から「わたしたち」と（アンド）「あなたがた」という相互関係へと変容させることの困難である．第二の困難は，協力的な相互関係がつくられたかにみえても「《国境域での混交・混成の根深さ》という問題」[34]，言いかえれば境界域・国境域という特有の条件によって歴史的に構造化されてきた差異，社会関係の非対称性，齟齬がはらんでいることの問題である．しかしそれは「《多様な文化的アイデンティティの共存》に至る手前の状態」であるという．よってこれら「二重の困難」とどう向き合い，いかにしてポテンシャルを引き出していくのか，その方途を探るのが課題となってくる．

これらの視点を念頭に置きつつ，故国喪失者団体の相反する二つのネットワークの“わたしたち”が追悼のモーメントでどう構成されるかをみていこう．

3. “ナショナル・ブロック”の“わたしたち”の構成

3.1 「フォイベの殉国士」という認知的フレーム

「フォイベの殉国士（Martiri delle Foibe）」は“ナショナル・ブロック”が用いる認知的フレームである．この「フォイベ」は，以前の拙稿で説明したように[35]，本来はカルスト台地における溶食作用でできた窪地を意味する用語であった．そしてこれらの窪地が，第2次世界大戦中後の混乱期（1943年秋と1945年春）にこの地域を軍事的に制圧したユーゴスラヴィア軍から反抗の嫌疑をかけられた人々の死体を遺棄するのに用いられた．この一連の事件は，歴史的資料の問題，犠牲者の数，出来事の解釈，政治的利害の関与などをめぐって論争がたえないのだが，2004年の「回想の記念日」制定により，「ヴェネツィア・ジューリアのイタリア人が被った悲劇」として制度化されたのは，以前に述べた通りである[36]．この制度化に貢献したのが，“ナショナル・ブロック”の中心に位置する諸団体の活動である．では「フォイベの殉国士」をめぐる追悼式がどのように実施されたのかを，2009年2月9日トリエステでの追悼儀式に焦点を当ててみていこう．

3.2 「フォイベの殉国士」追悼儀式

午前10時よりトリエステ市内にて「フォイベの殉国士と故国喪失者を記念した献花」（表－2，イベント4）の追悼儀式が企画されている．儀式の場所となるのは，ドゥオーモや中世の城がある旧市街の中心部であり，「追憶の公園」と命名された地区である．この丘の頂上にはトリエステのイタリア「回収」後に，ムッソリーニによって建立された第1次大戦戦没者記念の巨

大なモニュメントがあり，丘の斜面には大戦で戦死した兵士たちの石碑が無数に並べられている．「フォイベの殉国士」の記念碑は，「英霊」を祀るこの空間のなかに，イストリア連合会によって 2000 年 3 月に建てられた．本日の追悼式は，この連合会と国民同盟（表－1，10）が共催で執り行われる．

儀式開始の 30 分ほど前から「フォイベの殉国士へ」と刻まれたモニュメントの周囲に 20 名ほどの人が集まっている．スーツにネクタイ，トレンチコートといったフォーマルな服装の中年男性たちが，背丈以上の高さのある団体旗を組み立てている．これらはイストリア故国喪失体験者団体の旗である．開始 5 分前，モニュメントの周りには団体旗を持って屹立した人々が 10 名ほど整列し，その正面には主催団体の代表者 5 名が厳かな雰囲気で時間を待つ．その他の人々が代表者たちを円で囲むようにして集まり，知り合いの人と挨拶をしたり写真を撮ったり立ち話をしながら待っている．国営ならびに地方放送局のロゴ入りテレビカメラを持った 3 名ほどの報道関係者がこの様子を映像に収めている．公人としてトリエステ自治体と県の代表者が参列している．

10 時ちょうどに軍隊のような号令によって儀式が始まる．報道関係者はいっせいに撮影を始める．トランペットを持った人々が開会の合図を鳴らす．スピーチ原稿を手にした婦人が拡声器から追悼の辞を述べる．その後，モニュメントの正面に横一直線に並んだ代表者 5 名が献花をする．

「続きまして，すぐ上のサン・ジュストの丘で追悼の辞を行いますので，みなさま丘までおあがりください」と進行役の男性が参列者にアナウンスする．辿り着いた先は，丘の頂上にある大戦の巨大なモニュメントの前である．モニュメントの両脇に団体旗を掲げた人たちが整列する．正面には先ほどの主催団体の代表者たちが，花輪を手に抱えた 20 歳代の男性と高齢の男性の後ろに並ぶ．それ以外の参列者は両脇に集まる．そして先ほどと同じように，進行役の男性の号令で式が始まり，トランペットが流れ，代表者が行進してモニュメントに献花をして十字を切る．

「ここでの儀式はこれで終わりますが，引き続きリベルタ広場の記念碑[37]で儀式を行います．シャトルバスを用意しましたので，参加される方はご移動ください」．司会進行役の男性はさらに「なお午後 3 時半にはもっと重要な儀式がロズミーニ広場で行われます」と付け加える．そして嫌悪感を吐き出すように「野蛮なヴェルガローラのやつら（Barbari Vergarolla）へのマニフェストが行われます．ここでイストリア連合会の代表がスピーチをされます．みなさまどうぞご参加ください」とアナウンスする．午前の儀礼は慣例的なものだが，午後の儀礼はそれ以上の意味合いがあるかのような予感を参加者たちに残す．「ヴェルガローラ」は，以前の拙稿[38]でふれたが，ポーラ／プーラ（クロアチア）の海岸で 1946 年 8 月 18 日に起きた事件を指している．吐き捨てるようにいわれた「野蛮なやつら」とは，この事件の首謀者とされるユーゴス